



JIC インフォメーション

第 195 号 2018 年 2 月 10 日 臨時号
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

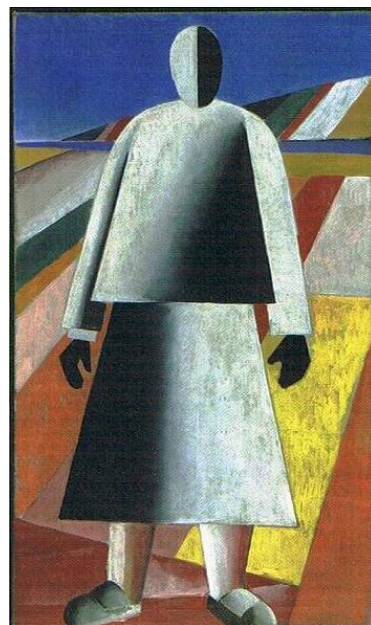
東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリースビル 7 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



《特集》ロシア革命 100 年。(上左) 2 月革命の始まりは婦人労働者たちのデモだった。(上右) ロシア・アバンギャルドの旗手、マレーヴィチの作品より。(下) 革命の指導者レーニン

<http://www.jic-web.co.jp>

<大阪日口協会講演会>

「ロシア革命 100 年」～偉大なる実験の結果は
……………藤本和貴夫（大阪日口協会理事長）……………2P
ロシアビジネスの勘所～ビジネスの浮き沈みの経験から
……………岩佐 毅（トライデント社代表）……………12P

<日本におけるロシア年・特別協賛企画>

加藤登紀子・百万本のバラディナーライブ（予告）……………15P
＜旅行記＞
2017 モスクワ戦車バイアスロン観戦記……………ねこくま……………16P
＜募集中＞ キルギスでの日本語教師……………20P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

大阪日口協会 講演会

2017 年 11 月 17 日、大阪日口協会の「ロシア革命 100 周年記念講演会」が開催されました。ロシア革命の背景となった第一次世界大戦(1914-18 年)からロシア二月革命、十月革命、そしてソ連邦結成(1922 年)にいたる歴史の流れが分かりやすく解説されました。以下、藤本和貴夫・大阪日口協会理事長(前大阪経済法科大学学長、大阪大学名誉教授)の講演録を大阪日口協会のご厚意により掲載させていただきます。(編集部)



「ロシア革命100年」偉大なる実験の結果は？

ロシア革命から 100 周年、この革命をどう評価するかということが現在議論になっています。ロシアでも 1991 年にソ連邦が崩壊してから、革命の評価をめぐるいろいろな意見が出ています。

現在のロシアでは、1917 年の二月革命については高く評価する。この点についてはほとんどの人が一致しています。ところが十月革命については様々な意見がある。もちろん十月革命を高く評価する人がいますが、他方では、「そこに現在のあらゆる問題点の出発点がある」と言う人もいます。十月革命については大きく意見が分かれているのが現状です。

ロシア革命 100 年と言っても話が拡散しすぎるので、今日は、1917 年の二月革命と十月革命、その結果ソ連邦が成立するまでの時期に焦点を当てて話をしたいと思います。1991 年にソ連邦が崩壊した理由を考える上でも、どのようにしてソ連邦が結成されたのかということは重要です。ソ連邦を結成している理由がなくなった、もともと考えていた方向と違ってしまった、ということがソ連崩壊の理由を考える上でヒントになるのではないかと思います。

ソ連邦の結成とソ連崩壊

ソ連邦＝ソヴェト社会主義共和国連邦が結成されたのは、ロシア革命から 5 年後の 1922 年 12 月のことです。当時、ロシア、ウクライナ、白ロシア、ザカフカースという 4 つのソヴェト社会主義共和国が別々にできていました。1917 年の革命でロシア帝国が崩壊した後に、革命によって最初に成立したのはロシア・ソヴェト共和国ですが、その後、ウクライナ、ベラルーシ、ザカフカースにも社会主義共和国が生まれます。これが一つになってソ連邦を結成する。どうして 4 つのソヴェト社会主義共和国が一緒になろうとしたか。

そのひとつは、社会主義に敵意をもった資本主義国の包囲のもとでの対外脅威に共同で対抗しようとしたことです。史上初の社会主義諸国を維持するためには団結しなければならなかった。二つ目の理由は、労働者・農民の国際連帯。この連帯を形にしたものが、4 つの社会主義共和国が集まって同盟を結ぶ＝連邦をつくるという方向だった。そして、もうひとつは民族のワクを超

えた共産党による統一ということがあったと思います。

ソ連邦崩壊の過程を見ていくと明らかですが、ソ連末期には共産党自体が民族別にバラバラになりました。共和国によって違う。民族によって違う。共産党自体が 分裂崩壊したことがソ連邦崩壊の大きな原因になったと思います。また、勤労者の国際主義を唱えながら、実際はソ連が支配する社会主義体制の矛盾があらわになります。

もうひとつの対外脅威論。これは革命後、イギリスやアメリカが干渉戦争を仕掛け、日本もシベリア干渉戦争である「シベリア出兵」を行いました。「外国の軍事的な脅威に対抗するためには、国内の自由を少々犠牲にしてでも内部統制を強化して外敵に対抗する必要がある」という説明は、民衆に対する一定の説得力をもっていたと言えると思うのです。

さらに、ソ連は第二次大戦でナチス・ドイツに攻め込まれ、戦後はアメリカとの冷戦がつづきました。資本主義国がいつ攻めてくるかもしれないという対外脅威の下で、ソ連は国の団結を維持してきたわけです。これが、1985 年にゴルバチョフ書記長が登場して、ペレストロイカ(改革)を推し進め、アメリカと核の削減をはかる。東西ベルリンの壁が崩れ、冷戦の終結へと踏み出したことで、対外脅威論による国内の締め付けの根拠が薄れたこととも関係すると思います。

<ロシア革命の背景>

第一次世界大戦の勃発～バルカン危機

さて、ロシア革命は第一次世界大戦と切っても切れない関係にあります。第一次大戦は 1914 年に始まるわけですが、いろんな回想録を読んでみても、大抵の人はまさか戦争が起こると思わず、しかもこれほど悲惨な長期にわたる世界戦争になるとは夢にも思っていなかったということがわかります。

第一次大戦の発端は、オーストリアの皇太子がセルビア人の革命組織の青年に暗殺された「サラエボ事件」です。しかし、この突発的な事件が世界戦争に発展するのは、それ以前に各国で戦争の準備が進んでいたからです。大規模な陸軍の軍拡競

争が行われていたのです。

1908 年 10 月にオーストリア・ハンガリー帝国がスラブ系の民族が居住するボスニア・ヘルツゴビナを併合してバルカン半島に進出します。バルカン半島の地図を民族別に色分けすると、民族が複雑に混ざり合っていることがわかります。そのなかで北からオーストリア・ハンガリー帝国が南下しようとする。東には、黒海をはさんで南側にオスマン帝国があり、北側にはロシア帝国がある。そういう帝国の間に挟まれているのがバルカン半島です。19 世紀に入ってオスマン帝国の力がだんだん弱くなってきた。その中で最初に起こったのがオーストリア＝ハンガリー帝国によるボスニア・ヘルツゴビナの占領です。もともとここはオスマン帝国の支配下にあった地域です。バルカン半島の人々の多くはスラブ系の人たちですが、彼らは、団結してオスマン帝国に抵抗します。バルカンの諸国はバルカン連盟を作り、1912 年 10 月にはバルカン連盟がトルコと戦争をしてトルコを破ります(第一次バルカン戦争)。その後、今度はバルカン連盟内部での領土争いで、ブルガリアと他の連盟諸国が対立し、1913 年 6 月の第二次バルカン戦争でブルガリアが敗れます。バルカン半島は非常に混乱し、列強の介入を招くことになります。近年でも、ソ連崩壊後に多数の民族が混住するユーゴスラビアで民族紛争が起こったことはご存じの通りです。当時、バルカン半島は「ヨーロッパの火薬庫」と言われました。

ボスニア・ヘルツゴビナを併合したオーストリアがセルビアとの国境近くで陸軍の大演習を行う。現在でもそうですが、国境地帯で軍事演習するということは、ほとんどもう戦争をするという威嚇をしているようなものです。軍事演習の視察でボスニアを訪れたオーストリア皇太子が市役所から車に乗って帰ろうとしたところを、セルビアの地下組織によって暗殺されたということです。

欧州の軍拡競争と領土争奪戦

サラエボ事件は、ヨーロッパの中心からは離れた地方で起こった事件でした。しかし、バルカン戦争を契機にヨーロッパの大国間では大規模な陸軍の軍拡競争が起こっていました。

普通、第一次大戦の背景として海軍の建艦競争が挙げられます。ドイツとイギリスが大きな軍艦を作る「建艦競争」をしたと言われています。しかし、三国協商と三国同盟間の対立が戦争になるとすれば、まず陸戦から始まるはずで、戦争に備えるためには陸軍をどれだけ増強するかということが大きな問題になります。

ドイツは、1913 年から軍拡法によって陸軍を 80 万人に増強します。フランスはドイツに比べて人口が少ないので、ドイツと対抗する兵力を作るために兵役期間を 2 年から 3 年に延長し、徴兵年齢を拡大してドイツとほとんど同じ 88 万人の軍隊を整備し、ロシアはもともと陸軍大国ですが、さらに 48 万人の増強を行う。すべての大国が猛烈な軍拡競争を進めているところにこの事件が起こったわけです。

事件は、1914 年の 6 月 28 日に起こり、ちょうど一月後の 7 月 28 日に、オーストリアがセルビアに宣戦布告します。三国同盟を

組むドイツはオーストリア側につき、ロシアは同じスラブ系のセルビア側につきます。さらに 8 月 3 日にドイツがフランスに宣戦、8 月 4 日にはイギリスがドイツに宣戦、6 日にオーストリアがロシアに宣戦しました。サラエボ事件から丁度 1 か月後に主要国が二つに分かれて、戦争に突入しました。

戦争開始まで 1 ヶ月かかったのは、この間、戦争に勝った後の領土の配分に関する同盟国間の密約が行われたからです。列強諸国は第一次大戦後にオスマン帝国が支配していた中東やアフリカの分割を進めますが、これらの秘密協定が暴露されたのは、ロシア十月革命のおかげです。十月革命で成立した革命政府が、ロシア帝国が結んだ秘密条約を全部公開したからです。

戦争の長期化と社会主義者の反戦運動

第一次大戦は、ドイツ・オーストリア＝ハンガリー帝国・オスマン帝国・ブルガリアからなる中央同盟国(同盟国)と、イギリス・フランス・ロシアを中心とする連合国(または協商国)の 2 つの陣営に分かれて戦われました。アメリカ、イタリア、日本ものちに連合国側に立って参戦しました。

ドイツ側は、電撃作戦で中立国であるベルギーに侵攻して、北からパリを攻撃するという作戦をとります。2週間でパリを占領する計画でした。そして開戦と同時にベルギーに攻め込みますが、当然ベルギーは抵抗し、さらにフランス側も防衛します。簡単にパリは陥落せず、当初考えた電撃戦による短期決戦で戦争は終わらなくなります。電撃戦は、戦線の膠着によって塹壕戦に変わっていきます。当初、前線に行く兵士はクリスマスには帰ってくると言っていたのですが、戦争はクリスマスどころか 15 年、16 年、17 年と続きます。戦争の長期化によって、各国で戦時体制の危機が訪れます。

1916 年、ロシアでは新たに徴兵制を導入した中央アジアで民族反乱が起こります。ドイツでは食料難でかぶら(蕪)しか食べ物になかったため、「かぶらの冬」と言われ、労働者のストが始まります。フランスでもストライキが起こります。

戦争開始に当たって各国政府は自国民を戦争に動員するために、ナショナリズムをあおり、自国の戦争の正当性を訴えます。ドイツでは、この戦争は「ロシアのツアリズム専制体制との戦争だ」。フランスでは「フランス革命の祖国を専制的ユンカー帝国ドイツから守れ」。ロシアでは「バルカンの同じスラブ民族を擁護せよ」、というわけです。戦争に反対する声をナショナリズムによって封じ込めようとします。しかし、戦線が膠着して戦争が長引くと、様々な抵抗運動が出てきます。

社会主義者たちはそのときどうしていたか。もちろん戦争が始まるまでは社会主義者たちは「戦争に反対」していました。ところが戦争が始まってしまい、政府による戒厳令、情報統制、それにナショナリズムの鼓舞が徹底される前で、反対の声を上げることが難しくなります。フランスの社会主義者は「戦争が始まってしまった以上は、祖国防衛以外を断念」し、ドイツでも、ローザ・ルクセンブルクら少数派を除き、大多数の社会民主主義者は議会で

の戦争公債に賛成し、戦争協力に方向転換しました。民衆の「勝った」、「勝った」という興奮と熱狂の中で、戦争反対の声はかき消されてしまいます。

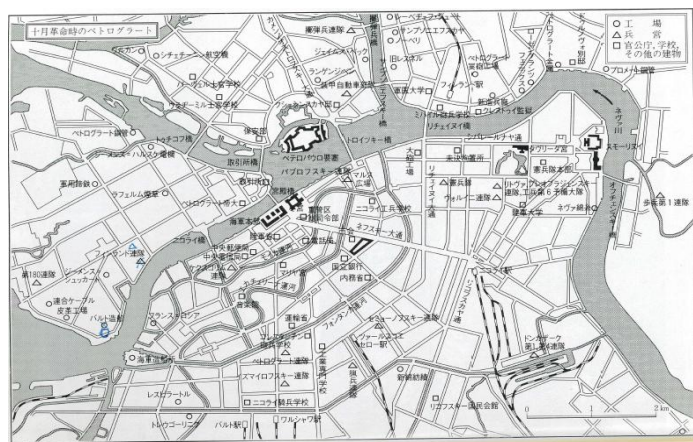
いったん戦争が始まってしまうとこれを止めることは非常に難しいということです。戦争を始めさせないことが何よりも重要だというのがその教訓です。しかし、戦争の長期化とともに、この戦争をいかに止めるかが再度問題になってきます。大戦中の社会主義者の国際反戦運動で知られているのは、15 年 9 月のスイス・ツィンマーヴァルト会議。16 年 4 月のキーンタール会議です。この会議にはロシアのレーニンなども参加して、いわゆる左派を形成します。いずれにせよ、国際的な反戦運動がその後再開されることになるわけです。

<二月革命>

婦人繊維労働者の「パンよこせ」デモ

広大な領土を持つロシアは、鉄道網が完備していないために武器弾薬の供給難、食糧難が早くから始まります。首都ペトログラードでは食糧品を求める長い行列ができ、人々の不満が鬱積していました。

ロシアの二月革命は、ロシア暦で 2 月 23 日(西暦 3 月 8 日)の国際婦人デーに集まった婦人労働者(繊維産業の女工たち)のデモが発端となります。それに近隣の工場労働者が合流する。ペトログラードの地図を見ると、ネヴァ川が東から西に流れていて、途中で 2 つに分かれてバルト海に注いでいます。ネヴァ川の右岸にブイヴォルグ区があり、ここに工場が集中し、その周辺が労働者地区になっている。他方、ネヴァ川分岐点左岸の中心部に皇帝の宮殿である冬宮、今のエルミタージュ美術館があります。労働者地区でのデモが中心街に向かうとすれば、ネヴァ川にかかる橋を渡ることが必要ですが、警察はこの橋を封鎖することでデモ隊が中心街に出るのを阻止します。橋を渡ることを阻止されたデモ隊は、その後は凍った川の氷の上を渡って中心街に向かうんですね。



婦人繊維労働者の「パンよこせ！」デモから始まったデモが他の工場にも波及して全市に拡大し、2 月 27 日には工場街の労働者が都心に出てデモが拡大を続けることになります。デモに対して軍隊が動員されてデモ隊への発砲を命じられます。ロシ



アの二月革命は典型的な民衆革命のモデルといえます。デモ隊に軍隊が発砲して鎮圧をはかるのですが、しかしそれでもデモは引き下がらない。そして次の日、発砲を命じられた部隊が将校に対して反乱を起こします。もうこれ以上市民を殺したくないと、軍隊で反乱が起こるのです。将校も部下の兵士に従わざるを得ない。その反乱部隊が拡大していった、デモ隊と一緒にになって、つまり労働者と兵士が団結して帝政政府を倒すことになる。そして団結した労働者と兵士は、1905 年革命の例にならって「ペトログラード労働者兵士ソヴェト」を組織します。革命開始後、ほぼ一週間で旧権力が崩壊しました。「ソヴェト」というのは会議とか評議会という意味です。

他方、国会は革命の開始と共にツァーリによって休会を宣言されますが、自由主義者を中心とする国会議員は、混乱した状況を打開するために有志が「国会臨時委員会」を設立します。官僚や将校はこれを支持します。そして最終的には、この国会臨時委員会とペトログラード労兵ソヴェトが話しあって、ロシア暦の 3 月 2 日に国会臨時委員会が帝政政府に代わる臨時政府を組織することになりました。そのような状況下でツァーリ・ニコライ 2 世は退位宣言に署名します。

自由主義者による臨時政府



こうして労働者・兵士のデモが帝政を打倒したことになりますが、デモ隊が勝利した理由は労働者と兵士が一緒に、労働者の側が武力をもったからです。普段、民衆は武器を持っていないし使い方も知らないわけですが、第一次世界大戦で戦争中

であり、民衆が武器を手にしたということがある意味で大きい。

もう一つ政治的に重要であったのは、ペトログラード労兵ソヴェトが 3 月 1 日に出した「命令第 1 号」です。これは、「すべての政治行動において部隊は労兵ソヴェトと自らの委員会にのみ服従し」国会の軍事委員会の命令は「労兵ソヴェトの命令と決定に反しない限り遂行するべきである」という命令です。労兵ソヴェトが政治的に非常に大きな力を持ったということです。当時の兵士のデモの写真があります。スローガンは、「人民、土地、自由、平和万歳」です。

労兵ソヴェトは、成立した臨時政府に対して「革命の成果を擁

護する限りは臨時政府を支持する」と決定します。その結果、3 月 3 日にリヴォーフ公を首相とする自由主義者中心の内閣ができ、6 項目の政府基本方針が発表されます。それは、

- 1) 政治囚・宗教家の大赦
- 2) 言論・出版・結社・集会の自由
- 3) 階級・信仰・民族差別の廃止
- 4) 普通選挙による憲法制定会議招集の準備
- 5) 警察の地方自治機関への所属と国民民警の設置
- 6) 普通選挙による地方自治機関の選出

労兵ソヴェトの要求がそのまま取り込まれています。

戦争と平和をめぐる対立

問題はその後です。一番大きな問題は戦争の問題でした。ロシアは連合国(協商国)側に立っていますから、臨時政府は連合国との同盟を維持して第一次大戦が勝利するまで戦争を続ける方針です。これは他の連合国との約束ですし、単独講和はしないというのが戦争開始時の連合国間の協定(ロンドン協定)でした。臨時政府としては国際的な約束を守る立場をとり、連合国もそれを歓迎し支持します。

一方、兵士や労働者の側の立場は、「革命的祖国防衛主義」といわれます。二月革命で成立した革命政権は武力を使ってでも守るが、しかし侵略戦争はしないという考えです。その後、ペトログラート・ソヴェトは、「無併合・無償金・民族自決の講和」、これが講和の条件であると主張します。第一次大戦の社会主義者の平和運動の中で初めて、この無併合・無償金・民族自決の講和という条件が出てきます。無併合＝占領した他国の領土を併合しない。無償金＝賠償金はとらない。民族自決＝それぞれの民族は独立して自分たちの国を作る権利をもっている。これがソヴェト側の方針です。

ただし、臨時政府とソヴェト側との平和についての考え方の違いは、実際には曖昧になっていて、曖昧なままで臨時政府が成立しているわけです。連合国側は、ロシアで革命が起こったけれども、戦争は一緒に最後までやるようにと圧力をかけてくる。5 月 1 日にカデット(立憲民主党)の政治家で臨時政府の外務大臣・ミリュコフが連合国に戦争遂行を約束し、それに覚書をつけて送ります。覚書は要するに戦争継続の意思表示なのですが、そこには、「ロシア国民の意向は現世界戦争を終局の勝利を得るまで遂行しようとするところにある」と書かれていました。つまりこの戦争を勝つまでやると書いてあった。しかし、この覚書が暴露されます。

ソヴェト側の立場は、革命的祖国防衛戦争は戦うが、敵を滅ぼして勝つまでやるとは考えていない。あくまでも防衛の範囲内で戦争はする、革命的祖国防衛主義です。ミリュコフを批判する大デモが起こってミリュコフは辞任します。こうして、最初の臨時政府は崩壊するわけです。

自由主義者と社会主義者の連立内閣

臨時政府は、このままでは政府はもたないので、ソヴェトから社会主義者を入れて連立政権を作る工作が始まります。

他方、ソヴェト内では臨時政府に参加するかどうかで意見が割れましたが、結局ソヴェト内の主流派のエスエル(社会革命党)とメンシェヴィキ(社会民主党の右派)が連立政権に入ることを決意します。こうして第一次連立内閣(第二次臨時政府)が5月3日に成立します。これは自由主義者と社会主義者の連立内閣で、自由主義者9名、社会主義者6名という構成です。

それまでロシア社会民主党の中では、社会主義者はブルジョワ革命の段階でブルジョワジーの内閣に入って自らの手を縛るべきではないという議論がされてきました。ブルジョワ革命後にブルジョワ的な資本主義発展があった後に初めて社会主義革命が成立する。ブルジョワ革命の段階で社会主義者が権力に入ると労働者の意に反したことやらざるをえず、労働者と対立することになる。だから、内閣に入らずに外からブルジョワ政府に対して批判的に対応すべきである。こう主張していたのがメンシェヴィキです。したがって、メンシェヴィキが臨時政府に入閣するのは当然おかしいということになりますが、ブルジョワジー・自由主義者は「もし、入閣しないなら我々は政権を放り出す。そうしたら帝政主義者がまた帰ってくるだろう」と主張しました。結局メンシェヴィキ、エスエルは入閣することに決しました。

連合国はロシアに対して、戦争継続の圧力をかけます。ケレンスキーは社会革命党(エスエル)出身の社会主義者ですが、陸軍大臣になり、6月に東部戦線で夏季攻勢を指揮しますが、ロシア軍の攻勢は結局失敗に終わりました。さらに、臨時政府はウクライナの自治要求を認めるのですが、閣内のカデット(立憲民主党)の三閣僚がそれに抗議して辞任します。カデットは「不可分の単一国家としてのロシア」を主張して連邦制を認めない立場です。

7 月 3 日には首都の一部兵士による臨時政府打倒のデモが行われ、臨時政府はこれを武力で弾圧、さらにレーニンがドイツのスパイだという噂が流されて、レーニンに逮捕状が出る(レーニンは変装して逃亡)。臨時政府はボリシェヴィキを弾圧して乗り切ろうとします。これを「七月事件」といいます。

転機となった反コルニーロフ闘争

このような混乱の中で、ケレンスキーを首班とする第二次連立内閣が組織されます。ところが、そのケレンスキーが総司令官に任命したコルニーロフ将軍が反乱を起こします。コルニーロフ将軍は、「将校の権威の復活、後方への死刑復活」などをケレンスキー内閣に要求して、部隊を率いて首都へ進軍するわけです。ケレンスキーは、一度は妥協しようとするのですがうまくいかないので、結局は自分の出身母体であるソヴィエトに反コルニーロフ闘争を呼びかける。そこでソヴェトのボリシェヴィキを中心とする活動家たちはコルニーロフの各部隊に乗り込んでアジテーション(演説)をするわけです。その言論の力によってコルニーロフ将軍の部隊は反旗を翻して、事実上消滅してしまう。言論の力＝アジテーションでコルニーロフ軍が消滅してしまったことは、その後のソヴェト側の運動に大きな力となりました。

反コルニーロフ闘争を指導して力をつけたソヴェト内のボリシ

エヴィキ、メンシェヴィキ国際派、エスエル左派は、ソヴェト権力の樹立を主張し、各地のソヴェトで多数派になっていきます。

かつてのロシア社会民主党はボリシェヴィキとメンシェヴィキに分かれ、さらにメンシェヴィキの中からメンシェヴィキ主流派に対抗するメンシェヴィキ国際派が生まれます。エスエル(社会革命党)も左派が分かれて、エスエル左派はボリシェヴィキに接近する。ということで、ボリシェヴィキ、メンシェヴィキ国際派、エスエル左派が、ソヴェト権力を樹立する核になります。そして、各地のソヴェトで徐々にボリシェヴィキやエスエル左派が多数派になっていく。これが 9 月から 10 月のことです。ペトログラート労兵ソヴェトの議長にトロツキーが選ばれ、モスクワ労兵ソヴェトは「全権力をソヴェトへ」という決議を行います。従来は臨時政府を支持していたソヴェトですが、それが臨時政府ではなくてソヴェト自身が権力を取るべきだという方向に変わっていくのです。その転機になったのが、反コロニーロフ闘争です。

<十月革命>

平和裏に行われた「武装蜂起」

いよいよ十月革命です。ロシア暦 10 月 25 日(西暦 11 月 7 日)に、第二回全ロシア労兵ソヴェト大会がペトログラードのスモールヌイ学院で開催されることになりました。ソヴェト権力派はこの大会で多数派をとること、さらに臨時政府を打倒する武装蜂起の準備を決めます。実際には全国からソヴェトの代議員が集まってくるわけで、その顔ぶれを見ないと多数派をとれるかわからない。最終的には 25 日の夕方段階でボリシェヴィキが多数派を占めることがはっきりしたのですが、ボリシェヴィキはそれを待たずに権力奪取の決議をしています。

ソヴェト権力派としては、スモールヌイで第二回全ロシア・ソヴェト大会が開かれるまでに臨時政府の閣僚を逮捕し、それを受けて大会でソヴェト権力樹立を宣言する目算でしたが、実際には大会が始まってからも冬宮での攻防が続き、ソヴェト大会が権力掌握を宣言したのは 26 日未明になってからでした。

普通、十月革命のイメージとしては、オーロラ号が大砲を撃ち、ペトロパブロフスク要塞からも大砲が撃たれ、それを合図に労働者や兵士が冬宮に攻め込んでいくシーンがよく描かれます。

ケレンスキー首相は冬宮にいます。スモールヌイはネヴァ川の曲がり角にあります。臨時政府のある冬宮までネヴァ川沿いに走れば 30 分程度の距離でしょうか。冬宮からネヴァ川をはさんだ対岸にはペトロパブロフスク要塞があり、そのすぐ隣にオーロラ号が係留されています。

実際はどうだったかというと、最初にペトロパブロフスク要塞から蜂起の合図に空砲を撃つことになっていました。それを受けて次は巡洋艦オーロラ号がネヴァ川の真ん中まで出てきて空砲を撃つ。それが攻撃開始の合図でした。実弾はほとんど撃たれていません。冬宮に届いた砲弾は数発で、誰も怪我しなかったといえます。最初に空砲を撃つ時も、要塞の兵士が撃たないと抵抗したので、結局はボリシェヴィキの誰かが空砲を撃ったとい

うことです。

エイゼンシュテインの映画「十月」(1928 年作)で出てくる有名なシーンがあります。冬宮に攻め込む労働者、兵士たちの映像です。この映像は、ソ連時代にはずっと十月社会主義革命の蜂起の場面として使われていたのですが、実際にはこんな場面はありませんでした。最近になってロシアの研究者はみんな「こんなことは無かった」と言い出しています。当時の記録を見てもありません。



エイゼンシュテインの映画「十月」より

冬宮の中には臨時政府の閣僚とそれを守る部隊がいて、それに対してソヴェトの活動家がオルグに入る。兵士たちの中に入ってアジテーションをして、「一緒に出てきたら罰せられない」と説得して、長時間かけて冬宮から部隊を引き上げさせていったのです。当時の回想録でいろいろな人が書いていますが、みなそういう話です。そして、最終的に臨時政府の閣僚が逮捕されることとなります。なお首相のケレンスキーは戦闘が始まる前に冬宮を抜け出しています。

「労働者・兵士・農民諸君へ」のアピール

10 月 25 日から始まった第二回全ロシア・ソヴェト大会では、この戦闘の推移を見つつ、26 日の朝 3 時頃に「労働者・兵士・農民諸君へ」のアピールを採択し、ソヴェト大会による権力掌握を宣言します。そして 7 点の行動綱領を示します。

- 1) 民主的な即時の講和と休戦の提議。
- 2) 地主地・皇室領・修道院の土地の無償没収、農民委員会への引き渡し。
- 3) 軍隊の完全な民主化による兵士の権利の擁護。
- 4) 生産に対する労働者統制の樹立。
- 5) 憲法制定会議の適時招集を保障する。
- 6) 都市へのパンと農村への生活必需品の供給を配慮する。
- 7) ロシアに住むすべての民族への民族自決権の保障。

二月革命の臨時政府の基本方針と比べれば分かっており、まず即時の講和と休戦を提議すること。つまり戦争をやめることが一番重要視されている。それから地主・皇室・修道院の土地は全部農民委員会へ引き渡す。そして、軍隊の民主化。生産の労働者統制。これを順番に見ていくと、民主的な講和と休戦は全人民的な課題です。その次は農民に対する土地の約束、さらに

兵士と労働者に対する約束となっています。

この 7 項目が十月革命の最初の綱領です。社会主義という言葉はどこにも見当たりません。一番重視されていたのは平和の問題です。農民は土地をよこせとずっと言ってきたし、兵士は軍隊の民主化をずっと要求している。最初のアピールは、兵士や農民、労働者がこれまで要求していたことをそのまま認めたということです。これで大会の一日目は終わります。

「平和に関する布告」

ソヴェト大会二日目は 26 日の夕方から始まり、「平和に関する布告」が全会一致で採決されます。

その内容は、

- ・民族自決にもとづく無併合・無償金の即時講和を全交戦国の人民と政府に提案する。
- ・秘密外交の廃止と臨時政府によって結ばれた秘密条約の全面的な公開を約束する。同時に休戦協定の即時締結を呼びかける。

講和を、政府だけでなく「人民と政府に提案する」となっているところがミソですね。それから秘密協定の暴露。なぜこれを言うかという、この戦争は何のために起こっているのかを明らかにするためです。帝国主義各国は秘密外交で領土をそれぞれ分割する密約を結んで戦争を始めた。この戦争は正義の戦争ではなくて、本当は領土の争奪戦であることを明らかにする。これはロシア外務省に密約文書が残っているので、これを全部暴露するということです。

この布告はレーニンが提案したのですが、「各国政府はロシアが譲歩しないという口実を失うことによって『布告』に答えなければなくなり、各国人民はそのことによって自分の政府の戦争に対する態度を理解することになるだろう。」と言います。しかし、各国政府が簡単に「うん」と言うわけがないことも分かっているわけです。その時にどうするか。レーニンは「もし各国政府がこれに対応しないなら人民自身がその政府を倒すだろう」という上手い言い方をします。戦争をやめないと各国で革命が起こるぞと呼びかける。そういう形で平和に関する布告がありました。

「土地に関する布告」

続いて、「土地に関する布告」が採決されます。

- 1) 地主的土地所有は一切の買戻し金なしで即時廃止。
- 2) 地主所有地・皇室・修道院・教会の土地はその家畜・農具等すべての付属施設もろとも、憲法制定会議まで郷土地委員会、郡農民ソヴェトの処理に移される。

革命で土地が国有化されたと言われてきましたが、この時国有化はされていません。土地は農民に手渡すとなっていて、国に渡すとはなっていない。「土地の社会化」という言い方をしますが、エスエル(社会革命党)が主張していたことです。ボリシェヴィキは国有化ですが、エスエルはずっと社会化と言っています。「土地に関する布告」ではエスエルの主張が取り入れられたのです。ただし、最後の項目で、普通の農民の土地とカザークの土地は没収されないとされました。これが土地に関する布告

です。

臨時労農政府=人民委員会議

「平和に関する布告」と「土地に関する布告」が大会で採択されたあとで、では政府をどう組織するかという議論に移ります。まず政府を決めて政府が何をやるという話ではなくて、何をやるかを決めた後でそれを実行する政府を決めるという形です。臨時労農政府=人民委員会議が政府の名称です。

これは、憲法制定会議が招集されるまでの臨時労農政府で、ソヴェト大会の決定を実現し、全ロシア労兵ソヴェト大会とその中央執行委員会による監督と更迭権の下にある。全ロシア・ソヴェト中央執行委員会が上にあって、その下に政府があるという形です。実際にはそうなりませんでした、形式上はこのような形になっていました。

人民委員会議長(首相)にはレーニン、内務人民委員(内務大臣)はレイコフ、外務人民委員(外務大臣)はトロツキー、民族問題委員会議長(民族問題大臣)はスターリンが就任します。

権力の中心であるソヴェト中央執行委員会には 102 名が選出されます。ボリシェヴィキ 62、エスエル左派 30、社会民主党国際主義者 6、ウクライナ社会主義者 3、エスエルマキシマリスト 1、さらに農民ソヴェト代表、軍隊組織代表、大会退席グループ代表の議席は空けておく決定がなされます。ここから分かるとおり、十月革命で成立した議会はボリシェヴィキとエスエル左派が中心になっていました。



人民委員会議(政府)、中央に座るのがレーニン

統一戦線政府の成立

ソヴェト権力の構成に関する論争を紹介しておくと、当時、社会主義者というのは非常に広い範囲で考えられていました。ボリシェヴィキ、メンシェヴィキは社会主義者で、エスエル(社会革命党)もアナキストも社会主義者です。だから、一方では社会主義者であるメンシェヴィキもエスエルも入った「同質社会主義政府」を作るべきだという主張があり、ボリシェヴィキ以外はこれに強く反対していませんでした。

他方、ボリシェヴィキは、臨時政府に参加したメンシェヴィキとエスエルは除外するというのが基本的立場です。ボリシェヴィキはエスエル左派との連立を迫ります。しかし、エスエル左派は幅広い連立政権を求めてこれを拒否しました。そのため最初の臨時労農政府にはエスエル左派も入らず、ボリシェヴィキ単独政権となります。しかし、エスエル左派はソヴィエト中央執行委員

会で大きな勢力を持っているので、エスエル左派と連立政権を組むというのがボリシェヴィキの立場です。

エスエル左派は農民に非常に大きな影響力を持っており、農民ソヴェトを主導していました。話し合いの結果、この農民ソヴェトと労兵ソヴェトの中央執行委員会が 11 月 15 日に合同して、12 月 9 日にエスエル左派から 7 人が入閣することになります。こうして 12 月の初めにボリシェヴィキとエスエル左派との統一戦線政府が成立しました。したがって、十月革命直後はボリシェヴィキ単独政権ですが、一月半後にボリシェヴィキとエスエル左派との連立政権ができあがるわけです。

憲法制定会議選挙～多数派を占めたのはエスエル

そのような形でソヴェト政権が成立するのですが、もう一つの問題は憲法制定会議です。革命前から帝政に対抗するほぼすべての政党が普通選挙制による憲法制定会議の開催を要求してきました。ボリシェヴィキもメンシェヴィキも同様の主張でした。ただし、二月革命後の臨時政府は戦争中であるということを理由に憲法制定会議の選挙を先伸ばししてきました。結局、十月革命の後になってボリシェヴィキが憲法制定会議の選挙を実施します。

11 月 12 日以降に全国で憲法制定会議選挙が実施されました。投票率は約 50%です。得票率は全国平均でエスエルが 40.4%、ボリシェヴィキが 24.4%でした。ただしペトログラートではボリシェヴィキが 45.3%、モスクワでは 50.1%で第 1 位でした。労働運動が高揚している都市部ではボリシェヴィキが多数派です。しかし、エスエルは農民に支持されており、地方ではエスエルが圧倒的に強い。この段階での名簿ではエスエル左派はまだ分裂せずエスエルの名簿に入っています。ボリシェヴィキ政権に対して、憲法制定会議選挙で勝ったエスエルは「全権力を憲法制定会議へ！」というスローガンで動き出す。

労兵ソヴェトは、要するに労働者・兵士の組織です。工場とか部隊の兵士の中から選ばれて出てくるのがソヴェトの代議員。階級的原理に立ち有産階級を排除するというのがソヴェトの原則です。それに対して憲法制定会議は全国民が対象ですから、階級的な原則はない。ボリシェヴィキ側はこれをどうするか。革命で権力を握ったのに、憲法制定会議ではエスエルが多数派になったからそちらに権力を渡しますということにはもちろんならない。

憲法制定会議の解散と社会主義宣言

1918 年 1 月 5 日に憲法制定会議が開催されます。ソヴェト政権が選挙を実施したわけですから、レーニンが首相のソヴェト政権が招集して憲法制定会議を開催します。ソヴェト政府は、憲法制定会議に対して革命で認められた諸政策の承認を要求します。平和に関する布告、土地に関する布告、ソヴェト政府などを承認せよというわけです。憲法制定会議の多数派はこれを拒否したため、ボリシェヴィキとエスエル左派は退場しました。会議はその後ソヴェト政権に代わる政府をどうするか議論をしますが、意見が一致せず政府の選出もできない。結論が出ないままこの

日の会議は終了し、その翌日に憲法制定会議は人民委員会議によって解散されることになります。

もし憲法制定会議の主流が力を持っていたなら、当然そこで新しい政権を作るなり、あるいは何か抵抗ができたはずですが、けれども実際は首都でデモも組織できず解散されるがままになってしまった。形式的には非常に民主的な会議ですが、政治的な力を失っていた。こうして首都では憲法制定会議は消滅してしまいます。

憲法制定会議開催の直後の 1 月 10 日に、第三回全ロシア労兵ソヴェト大会が開かれます。13 日には第三回全ロシア農民ソヴェト大会が開かれて、両者が合同して全ロシア労兵農ソヴェト大会が成立します。ここで「勤労被搾取人民の権利の宣言」が採択され、初めてこの宣言のなかで正式に社会主義国家を目指すことが明示されました。

<平和の代償>

「平和に関する布告」の行方

時間を少し戻して、「平和に関する布告」はその先どうなったでしょうか。

平和に関する布告を採択した後、ソヴェト政府はロシア暦 11 月 7 日にラジオで連合国側と同盟国側の全交戦国に「無併合・無償金・民族自決」の全面講和を呼びかけました。外務人民委員・トロツキーはペトログラード在住の連合国外交団にもこの通知を出しましたが、連合国の外交団は集まって会議を開き、それぞれの自国政府にこの呼びかけを無視するよう進言することを決定します。

ソヴェト政府は続いて 11 月 10 日から秘密条約の公表を開始し、政府の新聞『イズヴェスチア』に、順次秘密条約を公開していきます。

他方、連合国側がソヴェトの呼びかけを無視する中で、ドイツをはじめとする同盟国側は 11 月 14 日に休戦交渉の開始受け入れを通告します。ドイツはフランス側の西部戦線とロシア側の東部戦線の両方で戦争をしており、東部戦線がなくなれば当然西部戦線に軍隊を集中することができるわけですから、交渉を受け入れる。ロシアとしてはドイツ・同盟国側とだけ交渉するわけにはいかないので、あくまで全面講和を掲げてフランス、イギリス側に交渉を何度も申し入れるのですが、連合国側はこれを無視します。

結局、同盟国側との休戦交渉が始まり、12 月 2 日にドイツとロシアの間で休戦協定が結ばれます。そして、12 月 9 日からブレスト＝リトフスクで講和条約の交渉が開始される。ソヴェト政権側は全面講和を目指して、ドイツ・同盟国側との講和交渉を引き伸ばし、連合国側の参加をうながす戦術を取るわけですが、引き伸ばしにも限度がありました。

ブレスト＝リトフスク講和交渉

ブレスト＝リトフスク講和交渉でソヴェト側が主張したのは次のような点です。基本は「無併合・無償金・民族自決の講和」が条

件です。①占領地帯の暴力的併合は認めない。②現戦争で独立を失った国民の政治的独立を回復する。③非独立国民は国民投票によって独立の意思を表明する。④諸民族混住地帯における少数民族の権利を保障する。これは特にいろんな諸民族が重なり合っているバルカン半島をさしています。⑤「軍事的出費」つまり賠償に対する支払いの義務はない。戦争による個人の損害は参戦国の基金で保障する。⑥植民地問題は①～④の原則で処理する。これがソヴェト側の要求です。

ドイツ側の主張は、①ポーランド、リトヴァ(リトアニア)、ラトビアの民族自決。これはロシアからの自決です。②軍事費の補償は要求しない。③戦時中の他国国民の生命、健康、財産に関し、国際法に反する暴力行為の結果による損害の補償を求める。

ここでの問題は民族自決の内容です。ドイツはこの民族自決を逆手に取りました。当時、ポーランドの一部はロシア領です。リトアニアもほとんどロシアの支配下にあった。ここをドイツ軍が占領している。ドイツ軍の占領地帯は、民族自決の原則を適用してロシアから分離しドイツの支配下に置くというのがドイツ側の言い分です。さらに、軍事費の補償は要求しないけれど、国民の損害に対しては要求する。これは賠償と同じことです。ということで全面的に対立した。

ソヴェト側はどう対応したか。12 月 18 日人民委員会議はレーニンの書いた「ドイツの併合主義に反対して革命戦争の必要性を宣伝する」を決議します。つまり、ソヴェト側の主張が通らないなら革命の理念を掲げて戦争をするしかない。革命戦争をするという決議です。続いて 12 月 28 日、ボリシェヴィキの中心部隊であるボリシェヴィキ党モスクワ州ビューローが「民主的講和の締結は自国ブルジョワ政府を打倒した人民自身とのみ可能である」として、帝国主義ドイツとの講和交渉の中止を要求する決議を行う。このまま放っておくとドイツが再攻勢に出るかもしれない。しかし、ソヴェト政権内では「ドイツは攻められないだろう。だから革命戦争の準備をして突っぱねる。」という意見が主流でした。

ところが、現実にはロシア軍はほとんどもう戦えない。休戦協定が結ばれた前線からは兵士が勝手に、あるところでは部隊全体が帰郷をはじめていました。前線には戦闘能力がないことがはっきりしているのです。ドイツは、ポーランドなどドイツ軍占領地域を民族自決する地域とすると一方的に決定します(1月5日)。

レーニンの大転換～単独講和へ

ここでレーニンが大転換を行う。12 月 18 日の人民委員会議の決議はレーニンが主導して決定したのですが、1 月 7 日の段階になってレーニンは「併合主義的単独講和の即時締結に関するテーゼ」を提案します。その内容は、「今重要なのは他の国が革命に加わってくるまで一国内で持ちこたえる可能性をより確実に革命に保障することだ。」というもので、要するにドイツとの単独講和やむなしということです。併合主義的な講和だけれども、単独講和をすぐ結ぶべきだというテーゼをレーニンが出します。こ

れは大転換です。

しかし、レーニンの意見は政権内では少数派です。最終的にボリシェヴィキ党とエスエル左派の合同中央委員会で「戦争をせず、講和にも調印しない。」という決定がなされます。これは交渉団の団長であったトロツキーが出した「No Peace No War」というソヴェト内での論争に対する妥協案です。戦争を続けることができないというのはみんな共通の認識です。ロシア軍はもう戦えない。しかし講和に調印することは革命の大義を裏切ることになる。つまりドイツのポーランド占領を認めることになってしまう。民族自決の名の下にドイツの占領を認めることになってしまう。だから講和にも調印しない。この決定の背景には、やはりドイツは攻め込んでこないだろうという希望的な判断があったと思われます。

1 月 28 日(西暦 2 月 10 日)にドイツは最後通牒を出します。ブレスト＝リトフスク交渉の代表団長トロツキーは、「ロシア側は併合主義的条約の調印はしない。ただし戦争状態も終結する。軍は復員させる。」と宣言してブレスト＝リトフスクからロシアに帰ってしまう。

結局、ドイツ軍は 2 月 18 日(以後の日付は西暦 * 注)全面攻勢に出ます。ロシア軍は戦わずして退却するしかない。ロシア側は電報を打って「講和を受け入れる」と言うのですが、ドイツ軍は東への侵攻をやめない。3 月 3 日になってようやくブレスト＝リトフスク講和条約が調印された。ドイツ軍の占領地域はさらに広がってしまったわけです。

ソヴェト内の混乱はまだ終わりません。第四回全ロシア労兵農ソヴェト大会はこの講和条約を承認しましたが、エスエル左派はあくまで反対して政府から離脱する。ボリシェヴィキ(この時から共産党と党名を変更)単独政権に戻ってしまいます。これが 3 月 14 日から 16 日にかけての事態です。さらに 7 月の第五回全ロシア・ソヴェト大会中に、エスエル左派は「ドイツとの革命戦争」をスローガンに反乱を起こし、ドイツ大使ミルバッハを暗殺します。これが鎮圧されて、エスエル左派はソヴェトから放逐、1918 年 7 月の段階で共産党の単独支配が確立しました。

* 注: ロシア暦(ユリウス暦)は西暦(グレゴリオ暦)と 13 日のズレがあった(ロシア暦に 13 日足せば西暦となる)。この日付のズレを解消するため、革命後にソヴェト政権によって西暦が採用された(ロシア暦 1918 年 1 月 31 日の翌日を 2 月 14 日とした)。以後の記述は西暦で統一。

内戦と干渉戦争～戦時共産主義への移行

ともあれ、ドイツ・同盟国側と講和条約を結んだことで、ロシアは第一次世界大戦から離脱しました。しかし、ソヴェトの苦難は続きます。1918 年の夏には白軍の反革命反乱を連合国が支援して干涉軍をロシアに派遣する。さらに、8 月に入るとシベリアに取り残されたチェコスロヴァキア軍団を救出するという名目で日本とアメリカがシベリア出兵宣言します。1918 年の夏の時点では、ソヴェト政権はモスクワとペトログラードを中心とした狭い範囲だけを支配していたというのが実際です。ソヴェト政権は革命の成果を守りこれをロシア全土に広げるために、赤軍を建設して、工

業部門を国有化し、いわゆる戦時共産主義体制を敷きます。

ソヴェト政権は、革命後は、土地を農民が分配することを認め、労働者統制による工場や大企業の管理を進めました。その後、連合国による干渉戦争と白軍との内戦という非常事態に直面して、「全てを戦場に！」をスローガンに、中小工場や商業も国営化して個人経営を禁止します。それまでの穀物買上げ制度を廃止して、農民から穀物を強制的に徴発し、食料を配給制にしました。これが戦時共産主義と呼ばれるものです。

戦時共産主義は 1918 年 11 月から 21 年 3 月まで続きました。これは赤軍への武器・弾薬や食料の補給を確保し、危機を乗り切るための措置でしたが、戦争と内乱でロシア経済はますます荒廃しました。とくに穀物強制徴発への反発から各地で農民反乱が起こり、農民は生産意欲を失ってますます穀物生産が減少しました。1920 年と 21 年には干ばつによる飢饉が重なって、農村部で大量の餓死者が出ます。

第一次世界大戦の終結

第一次世界大戦は 1918 年の秋に終結します。9 月 29 日にまずブルガリアが休戦協定を締結する。10 月 30 日にオスマン帝国が降伏する。11 月に入るとオーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し、ドイツでも革命が起こって第一次大戦は終結しました(11 月 11 日にドイツと連合軍が休戦協定を締結)。

同盟国の降伏と第一次大戦の終結を受けて、ソヴェト政権はブレスト＝リトフスク条約の無効を宣言します。ドイツ軍の撤退とともに、占領地域からソヴェトはウクライナを取り戻しましたが、ポーランドやバルト諸国は独立しました。第一次大戦の結果、ロシア帝国、ハプスブルク帝国(オーストリア・ハンガリー帝国)、オスマン帝国は崩壊し、大英帝国だけが残りました。そして、1920 年 1 月に連合国がロシア封鎖を解除して、一応戦時状態はなくなったわけです。

ネップ＝新経済政策

1921 年 4 月の第 10 回ロシア共産党大会で、レーニンの提案でいわゆるネップ(NEP)＝新経済政策が採択されます。ネップというのは、それまでの戦時共産主義に代わって、商業の自由など部分的に市場経済を容認した新経済政策です。要するに、資本主義の一定の復活を認めるというのがネップです。

ネップに移行する一つのきっかけになったのは 21 年 3 月のクロンスタット水兵の反乱です。軍港クロンスタットの水兵はボリシェヴィキの中心部隊でした。その部隊が反政府反乱を起こしたことはソヴェト政権に非常な衝撃を与えました。反乱は、戦時共産主義の行き詰まりを示していました。

戦時共産主義の下で進行した経済の破滅状態を打開するために、レーニンが大胆な政策転換をはかったのがネップ・新経済政策でした。

ネップの下で、穀物強制徴発制は廃止され、農民は余剰生産物を自由市場で販売することが認められました。商店や工場の個人経営が認められ、労働者の雇用と商取引が自由にできるようになった。土地をはじめ銀行・大工場・外国貿易の国家管理の

原則は変わらなかったもので、社会主義を放棄したわけではありませんが、一定の範囲で資本主義的な経営を認めて人々の生産意欲を高めようとしたわけです。これによって農業生産、工業生産が回復し、食糧が出回るようになったけれども、一方ではネップマンと言われる金持ちやクラーク(富農)が出てくるといった新しい問題が起こりました。ネップは、レーニンの死後権力を握ったスターリンによって 1929 年に否定され、以後、計画経済と農業集団化による社会主義経済の建設が進むことになります。

ネップは 1980 年代のゴルバチョフ改革(ペレストロイカ)で、スターリン型の指令的計画経済ではない社会主義の別の可能性を追求したものとして再評価されました。レーニンがもう少し長生きしてネップが続いていたらソ連社会主義はもう少し違ったものになったのではないかという議論です。しかし、「いや。レーニンもネップは一時的な政策と考えていた」(だから、いずれスターリン型の指令経済にもどつたに違いない)という意見もあり、評価は分かれています。

ソ連邦の結成と対外関係の改善

さて、ロシアの領土から最終的に外国軍が撤退するのは 1922 年です。シベリア出兵で最後まで残った日本軍が 22 年 10 月 25 日にウラジオストクから撤兵した(ただし、北樺太はまだ日本軍が占領したまま)。これで外国の干渉軍からロシアは一応解放され、反革命軍も鎮圧された。こうして、この年の 12 月にソ連邦が結成されます。1922 年 12 月に、ロシア、ウクライナ、白ロシア、ザカフカースの 4 つのソヴェト社会主義共和国が一つになってソヴェト社会主義共和国連邦を結成した。結成の理由は、一つは社会主義者の国際主義、国際連帯です。二つ目は民族別でない統一された共産党組織。三つ目が国際資本主義の包囲の脅威への対抗です。

国際資本主義に対抗して各国での革命運動を支援するために、コミンテルン(共産主義インターナショナル)が結成されるのは 1919 年 3 月です。

1917 年の十月革命から 5 年を経てようやく社会主義国家の形が整ったということです。

ネップでソヴェト政権が経済政策を転換したことは、資本主義国との関係にも変化をもたらしました。ソヴェト側にとっては経済再建のために対外貿易の拡大と先進技術が必要です。ヨーロッパ諸国もネップを資本主義の方向を目指す政策と見て、ソ連容認に傾きます。

第一次大戦の敗北とベルサイユ講和条約の巨額賠償金の重圧に苦しんでいたドイツがまず動きました。1922 年 4 月にドイツがラパロ条約を結んでソヴェト政権を初めて承認します。これは「まさか」という感じで、ヨーロッパに驚愕を与えます。1924 年にはイギリス、イタリア、フランスが相次いでソ連を承認しました。

ラパロ条約の締結と同時にドイツとソ連はもう一つ秘密の軍事協力協定を結びます。ドイツはベルサイユ条約で軍艦の建造とか飛行機の製造など、軍備拡張を全部禁止されているわけです。さらに軍隊の訓練も簡単にできない。それらをロシア国内でやる

という秘密協定を結んだのです。ロシア側からすればドイツの軍事技術を手に入れられる。ドイツ側は密かに軍備強化ができる。この秘密協定はドイツでヒトラー政権が誕生する 1933 年まで続きます。

それで、最初にスターリンの粛清に遭うのは赤軍の将校たちです。これはドイツのスパイとして粛清に遭うのですが、その背景にはこういう関係があった。ドイツ軍とソ連軍は一時期非常に親しい関係にあったのです。

1924 年から 25 年にかけて、ソヴェト政権内ではトロツキーの永続革命論とスターリンの一国社会主義論の論争があって、スターリン(一国社会主義論)が勝利する。これは理論的な問題というよりは、むしろ組織的な問題です。要するに書記局を握っていたスターリンが権力闘争に勝利したということです。

ロシア革命とアジア・中国

最後に、ロシア革命とアジアとの関係に触れておきます。

ソ連は西ヨーロッパの資本主義国から包囲されていたわけですが、中国と何とかよい関係を持とうとする。1919 年 7 月、ソヴェト政権は中国に対してカラハン宣言を出します。これは「旧ロシア帝国の帝国主義的領土政策は放棄する。中国から奪った領土を返還し、不平等条約を自発的に撤廃する。」という内容で、将来の中ソ関係の基礎となる原則をまとめたものでした。カラハン宣言は世界最初の対中国平等宣言で、五・四運動以後、反日・反帝国主義、反封建主義の要求を強めていた中国各界から大きな歓迎を受けました。

ただ、この宣言は第一次(19 年 7 月)と第二次(20 年 9 月)で一部違っており、その後の中ソ論争や外交紛争の原因にもなりました。現在は第二次カラハン宣言が一応正式の文書ということになっています。

ロシア革命は、アジアにも大きな影響を及ぼしました。1921 年中国共産党が結成され、22 年には日本共産党が結成されます。特にソ連と中国の関係は緊密化する。ブレスト＝リトフスク条約で最初にロシア側代表団団長を務めたヨッフェが孫文と 22 年末に会談し、23 年には蒋介石がモスクワへ留学する。コミンテルン代表のボロディンが孫文の政治顧問になる。1924 年 1 月に第一次国共合作(中国国民党と中国共産党の協力関係)が成り、同年 5 月に中ソ国交樹立が行われました。

日本との関係では紆余曲折の後、1925 年 1 月に日ソ基本条約が調印されます。この条約で日本はソ連を承認して、最終的に北樺太から撤兵しました。

ここまでの、ロシア革命後ソ連邦が誕生して、対外関係が一応落ち着くまでの話です。

<むすび>

今日の話を簡単にまとめておきます。

・第一次大戦は突然起こったわけではありません。その前提として軍拡競争があったということを知っておく必要があります。

・ロシア革命の焦点はやはり戦争と平和の問題です。この戦争をどういう形で終結させるか、既存の国際関係や外交関係ではうまくいかない。ソヴェト政権がやったような形でしか戦争を終わらせることができなかったわけです。

・「無併合・無償金・民族自決」をどのようにして実現するか。民族自決という言葉はいろいろな使われ方をしました。その後のソ連共産党の中では民族自決を誰が言っているのか、ブルジョアジーなのか、プロレタリアートなのか問題になる。ブハーリンが勤労者の自決以外は認めないといった議論を展開し論争が続きました。

・秘密条約の公表と秘密外交廃止の現代的意味は何か。現在でも時々密約が暴露されますが、これを最初にやったのはソヴェト政権でした。政府の暴走を食い止め、歴史を検証する上でも、外交秘密の解除は必要です。

・革命と内戦は一体のものであるということ。これはやはり切っても切り離せない問題で、フランス革命を見ても明治維新を見ても、革命だけで終わるということはありませんでした。むしろ革命後の国家権力の在り方を決めるのは革命後が重要です。

・ソ連邦の結成とその崩壊は裏表の関係にあります。共産党が崩壊したのがソ連崩壊の最大の原因ではないかという意見があります。ソ連が崩壊した時に、中国社会科学院のある研究所の研究者と議論していると、「われわれの任務はなぜソ連共産党が潰れたのかを調べることだ。」と言っていました。ソ連崩壊の理由は共産党の崩壊にあるというのがおそらく中国の結論で、したがって中国指導部は「共産党は絶対崩壊させない」という方針をとっているのではないのでしょうか。

・ソ連崩壊までには体制改革の試みがいろいろありましたが、成功しなかった。ソ連だけではなく、ハンガリー、チェコ、ポーランドなど東ヨーロッパでも改革はうまくいかなかった。ソ連が強権をもって改革の芽を潰したのもありますが、なぜ改革できなかったのかという問題は現在もなお残っています。

・アジアにとっての意味は、やはりヨーロッパとは違う特徴をもっている。中国の国共内戦と国共合作の背後にはソ連とのいろいろな結びつきがあるし、現在でもそういった関係があるわけで、それはそれで議論すべき点があると思います。

ロシア革命は、それまで理論上でしか存在しなかった社会主義国家を生み出した。その国家建設の実践は、当時の国際関係やそれぞれの国民の力量によってさまざまな影響を受けることになった。その国家建設の実践の経験を、多角的に再度検討することが現在求められています。ロシア革命の研究は、政治とイデオロギーの壁に阻まれて実証的な研究がなかなか進みませんでしたが、革命 100 周年を機に再び世界中で関心が高まり、今後さらに研究が進むことを期待しています。

(2017 年 11 月 17 日、大阪日口協会講演会での講演録)。

17 年 11 月 28 日にロシア NIS 貿易会主催で「ロシアビジネスセミナー」が大阪で開催されました。セミナーでは、日本通運舞鶴支店の室田国際輸送課長、福井県立大学のペロフ教授、トライデント社の岩佐毅代表らが、「多角的な視点からのロシアの現在」というテーマでそれぞれ報告を行いました。

以下、岩佐毅さんの報告を同氏の了解を得て掲載します。ソ連時代から 40 年にわたる岩佐さんのビジネス経験は、それ自体が波乱の一代記で興味深く、現在のロシアを知る手掛かりにもなると思います。(編集部)



岩佐氏近影;ウラジオストクにてユル・ブリナーの息子ロックさんと(2017 年 9 月)

ロシアビジネスの勘所 ～ビジネスの浮き沈みの経験から

岩佐 毅(有限会社トライデント・代表取締役)

開業資金 50 万円で貿易会社を設立(1977 年)

私は神戸市外国語大学でロシア語を勉強して、卒業後、白系ロシア人が経営する貿易会社で 7 年間働きました。その後、開業資金 50 万円で自分の会社を設立して、以来約 40 年間ソ連・ロシアとの貿易に取り組んでまいりました。その間一度会社を倒産させましたが、もう一回何とか頑張って立ち上がり、現在 74 歳ですが現役で働いております。

会社を設立したのは 1977 年、私が 32 歳の時です。中古のバンを 1 台 10 万円で買って、小さな事務所を借りて会社をスタートさせました。

ソ連船の「御用聞き」で船舶用品を販売

仕事は日本の港に入るソ連船への船舶用品の販売です。当時、日本全国の港に旧ソ連の船が年間 4000 隻くらい来ておりました。今はもうかなり少なくなっていますが、当時は木材運搬船であるとか、石炭運搬船、コンテナ船など、ソ連から日本を経由するインド航路やアメリカ・カナダ航路、オーストラリア航路もあって、たくさんのソ連船が入っておりました。そういう船の航海用品＝食糧や日用雑貨、部品、工具といったものを、「御用聞き」で船に行き注文取りをする。こういう仕事がスタートだったわけです。

神戸、大阪、堺、和歌山などの港に入港するソ連の船を毎日のように訪問しては、注文を取って商品を買ひ揃え、納品するのが私の日課でした。

最初はごく小さな注文しか取れなかったのですが、毎日船に通って御用聞きをしているうちにだんだん注文が取れるようになって売上が増えていきました。しばらくはうまくいったのですが、1979 年 12 月にソ連がアフガニスタンに介入して戦争を始めた。これに対してアメリカが厳しい経済制裁を行います。ソ連船の寄港が減って、売上が激減しました。「これは何とかせないかん」ということで、それまでソ連に行ったことがなかったんですが、ウラ

ジオストクの極東船舶公団(FESCO)に乗り込んで「何かよい仕事はないか」と商談しようと、初めてソ連(ロシア)に出かけました。冬でしたがコンテナ船に飛び乗った。ナホトカの港はもう真っ白で 1m くらい氷結してました。「これがロシアだ」と凄く感激したことを思い出します。

大径鋼管運搬船の取引から各船舶公団との取引拡大

ナホトカでの商談はたいした成果がなかったのですが、しばらくたってからウクライナのオデッサに行きました。なぜオデッサかというと、そのころ日本の大手鉄鋼メーカーが、確か新日鉄、日本鋼管、川崎製鉄、住友金属だったと思いますが、石油ガスパイプラインの鋼管をソ連から大量受注したのです。直径 146cm の大径鋼管を年間 100 万トンづつ 10 年間、計 1000 万トンの輸出です。鋼管を運ぶ船団がオデッサ(黒海船舶公団)から日本にどんどん来まして、その船団と親しくなって結構たくさんの注文をもらって、それで一度オデッサに来ないかということになったのです。

10 年間くらいオデッサの黒海船舶公団と商売しましたが、いろんな商談が一杯来るようになったのです。50 万円の元手で商売を始めた時に、一番最初にとった注文はたったの 4 万円、段ボール箱 1 個納品しただけだったのですが、ロシア(ソ連)の懐にうまく入り込んで、この頃には大径鋼管を運ぶ船のワイヤーロープだとかチェーンだとか、そういう資材を 1 回の契約で何千万円といった単位で注文が取れるようになったのです。オデッサに行くと、さらに「こういうものを調達してくれ」と注文が増えて、港湾管理局向けの船舶機器や建設機械なども輸出するようになりました。

写真は、大径鋼管を 22000 トン積んだ船です。一航海 1 カ月ちょっとで日本からオデッサに着くのですが、荷物を積むのにも 1 カ月、荷降しにも 1 カ月くらいかかりました。排水量 5 万トン以上の大きな船が数隻おりました。こういう船団と親しくなって、毎年 4～5 回はロシアやウクライナに通っておりました。

マリエンエンジニアリングに進出

旧ソ連には、ナホトカ、ウラジオストク、サハリン、レニングラード、ノボロシースク、オデッサなどに海運省傘下の船舶公団があって、これは全部国営企業です。各地の船舶公団と商談するために、これまで 100 回くらいロシアに行きました。

各船舶公団には船舶修理部門があって、そこから韓国、日本、シンガポールあたりで船舶修理をやりたいという話も来ました。これは 4 年に 1 回船をドックに入れて、検査と修理をする仕事です。1 隻受注すると数千万から一億円の仕事になります。マリエンエンジニアリングの代理店契約を結びまして、シンガポール、韓国、日本の造船所にソ連船をたくさん入れて修理しました。年商は十億円を超えました。



サハリンの漁船 10 隻の改装工事を受注したり、極東船舶公団所属の大型客船の改装工事、韓国現代重工で新造する 5 隻の大型タンカーの装備品・船舶機器部品を受注したりして、各船舶公団との取引は拡大し続けました。

ナホトカの港湾管理局とも関係ができて、「一緒に船を購入して海運会社をやろう」ということになりました。1993 年にブルーアクアマリン号という 6500 トンの中古船をナホトカ港湾局と共同で買い、シンガポールに会社を設立して、主に鉄鋼製品の運搬をやりました。これもなかなか面白いビジネスだったです。

訪ソ中にクーデター事件に遭遇(91 年 8 月)

1991 年 8 月 19 日にクリミアのヤルタでゴルバチョフ書記長が監禁されるクーデター事件が起こりました。実はその時、私はクリミアの近くのオデッサにおりまして、急遽モスクワにもどったらもう大変な状態でした。(写真)

この戦車はクーデター側ではないのです。戦車の背後に川があって、その対岸に国会議事堂がありました。その前でエリツイン支持・クーデター反対の市民が 1 万人くらい集まって集会をやっているときの写真です。モスクワにもどってきて、ホテルに向かっていたらバリケードで行けない。この戦車は、クーデターに反対するエリツインや市民たちを守るために、寝返った兵士たちがここに停めていたのです。戦車砲は外を向いている。いつ撃ち合いになるかわからない状況の中で、ロシア人たちがたくさん戦車の周りに集まっていました。この時ロシア人のハートに触れた思いがして大変感動したのですが、おばあさんが花



を持って来て大砲の先に花をさして歩いたのです。女性たちがお菓子やジュースを持ってきて兵士たちに配っている。これまでいろいろな国でクーデターがありましたが、市民が軍隊に花を持って来たという話は聞いたことがありません。ロシア人のハートというのはこういうものなんだなと思って感動しました。

市民が集まってクーデターへの抗議行動をしているうちに、ヤゾフ国防相が自殺したという話が伝わって、それでクーデターが失敗していったのですが、その時「ワ～」と歓声が上がりました。「あっ、この国は大丈夫だな」と思ったのを今でも覚えております。

ソ連崩壊後、会社が倒産(1995 年)

クーデターは失敗に終わったものの、その年の 12 月にソ連は崩壊しました。ビジネスはそれからが大変でした。大混乱です。クーデター事件以後、日本の銀行ではソ連(ロシア)の信用がゼロになった。当時、ナホトカ港湾局と 5000 万円の契約をしてソ連国立銀行から LC(銀行保証書)ももらっていたのに日本の銀行は買い取りを拒否した。たちまち会社の資金繰りが苦しくなりました。

主要取引先であった黒海船舶公団も次第に雲行きが怪しくなってきました。ソ連崩壊後もしばらくは注文が続き売上を確保していたのですが、売掛金が次第に膨らんでいって、ついに約 5 億円の船舶修理費の不払いを食らいました。交渉しても埒がきません。ついに法的手段を講じて、船の差し押さえを 2 回やって、最後には回収したのですが、しかし 2 年くらいかかりまして、その間商売はもうほとんどゼロです。

当時社員が 15 人か 20 人いました。シンガポールにも会社がありました。結局、1995 年に倒産しまして、会社も個人も全部破産整理して、まったくの無一文になりました。私が 52 歳の時です。

ロシア語通訳翻訳業で再起を目指す

その後は、五十面を下げてアルバイトで糊口をしのぐ日々です。警備員や引越し手伝い、トラック運転手など、いろんなアルバイトをしましたが、とてもじゃないがお金にならない。慣れないし、52 歳ではよい仕事もない。ただ、時々ロシア語通訳の仕事がありまして、結局ロシア語通訳・翻訳業で再起を目指すことにしました。

水産庁の漁業取締船というのがあって、ロシアの海域周辺で密漁を取り締まる船に通訳として乗船すると、これは 1 カ月単位の乗船になるのですが、結構いい収入になりました。司法通訳でロシア人が絡む犯罪の取り調べや裁判の通訳もたくさんやりました。

そうこうしているうちに少し資金ができました。もう一回会社ということではありませんが、小さな事務所に「日露ビジネスセンター」という看板を出して、ロシア語通訳・翻訳・コンサルティング業務を本格的に始めたのが、50 歳台の後半のことです。

ロシア貿易に再挑戦～中古車輸出

それからしばらくして、ソ連の崩壊後混乱していたロシア経済もだんだん落ち着いてきました。ソ連時代にはすべての商売が国営でしたが、ロシアになってビジネスが自由になりました。個人事業も貿易もできるし、外国にも自由に行けるという自由な体制に変わりました。

それでもう一回ビジネスをやろうと思って、有限会社トライデントでロシア貿易に再挑戦することにしたわけです。当時、零細企業が一番やりやすかった商売は中古自動車の輸出ですね。日本からロシアへの中古車輸出はソ連崩壊前後から増え始め、ピーク時(2008 年)には日本から海外輸出される全中古車(年間約 120 万台)のうち半分がロシア向けでした。とにかくもうドンドンと中古車が出ていました。私もロシア側から頼まれてやり始めると、あっという間に年間 500～600 台の販売になり、何年間かよい取引が続きました。

その後、ロシア側で中古車輸入規制の問題があったり、アメリカの経済制裁と原油価格の下落でロシアのルーブルが半分以上に下落したりで、今では中古車輸出が非常に減って、最盛期の 10 分の 1(年間 5 万台)くらいになっています。

現在は中古車部品輸出が中心に

これまで日本の中古自動車がロシアにどれくらい輸出されたかという、統計では累計 1800 万台だそうです。日本では、自動車は何年か経つと「もう 10 万キロ走った」と言ってスクラップにしていますが、実際には日本車は 10 万キロでは全然壊れない。まだまだ何十万キロと走れる。輸入中古車の値段も上がったので、ロシア人たちは日本と違ってずう～と乗り続けておりまして、現在は自動車の修理部品の需要がすごくあるわけです。

新品の部品もたくさん出ていますが、新品はメーカーが直接販売するとか、大手の代理店・商社が扱っていて、我々零細企業には売ってくれない。我々にできるのは中古自動車部品です。解体屋に入った中古車を分解して必要な部品を集めてコンテナで送る。これが今は非常に盛んで、日本全国のちょっとした解体屋にはたいていロシア人がいます。私の会社では、青森から福岡まで約 10 カ所に取引先のロシア人を呼んで常駐してもらって、そこで必要な部品を収集してコンテナで出す商売を続けております。年間約 2 億 5000 万円の取引で、40 フィートコンテナを月に 5～6 本出しています。まあ、これで十分やっていけます。

というようなことで、これが私の浮き沈みの体験です。



ロシア貿易の特徴と勘所

最後に、私がこれまでのロシアとのビジネスで感じたことや知ったことを、少しお話しておきたいと思います。

ソ連時代から含めて約 40 年間、ロシア、ウクライナ、カザフ、キルギスといった国々と取引をしてきまして、その間いろんなことがありました。うまくいったこともあるし、失敗したこともたくさんある。最近のことで言えば経済制裁ですね。関係ないと思ってますが、やっぱり関係ある。為替レートが突然半以下になって、輸入品価格が倍になったり 3 倍になったりするわけです。それでパッと止まってしまう商売もあります。そういうリスクが常にあります。日本で為替が 1 ドル 100 円から突然 50 円になったりすることはほぼないと思いますが、ロシアの場合はそれがあります。

これは国際情勢にもかかわっていますから、なかなかそういったリスクを回避できないと思いますが、為替のリスクがすごく大きいということは、やっぱり考えておくべきだと私は思います。

ロシア人の対日感情は非常にいい！

いいこともあります。何かというと、ロシア人の対日感情は非常にいい。彼らは日本の国とか日本人をとて信用している。「日本製は品質がいい」、「商売をしても日本人は信頼が置ける」、そういう気持ちを一般的にロシア人はみんな持っています。日本人はあまり知りませんが、これはすごく大きなプラスだと私は思います。

最近のロシアのビジネスマンは、ソ連時代と違って役人ではない。ソ連時代にはビジネスの相手は国営企業で、コネを利用したり裏取引を上手にやる必要がありました。しかし、今は違います。大きな会社のことは知りませんが、中小企業の場合はロシアの経営者はすごく若い。私のつきあっている範囲では 50 代以上はもうあまりいません。ですから、非常にビジネスライクで決断力がある。20 代 30 代の若さで相当なビジネスをやっている人がいっぱいいます。そういうプラスもあります。

中小企業の成功事例

大手企業もロシアに多数進出していますが、プラント輸出だとか工場建設、石油、ガス、木材、石炭などの資源輸入、そういった大型ビジネスが中心です。しかし、世の中にはもっと小さなビジネスがいっぱいあるわけです。大手がやらない小さな商売で、しかし、そこそこ利益の上がる商売。中小企業がスキマ産業的に取り組める案件はまだたくさんあると思います。

二、三の例が私に知っている範囲でご紹介します。

ちょっと特殊な例かもしれませんが、モスクワで 4 万坪の大規模ショッピングセンターを開設運営している賛栄商事という会社があります。羽曳野市の会社で、今は大阪市内に本社があります。日本人の社長が一人で行って、モスクワに 700 名のロシア人スタッフがいます。これには曰く因縁がありまして、現社長のお父さんがシベリア抑留者だったのです。抑留中に病氣したり、いろんな苦労があったのですが、収容所の所長が助けてくれて日本に無事帰って来た。日本で成功した後に、恩返しをしたいとその所長を探しに行くのです。それが縁になって息子さんをロシアに派遣して、ついには大ショッピングセンターを開設することになったわけです。これはロシアでも大変評価されています。

他の日本企業では、徳島の東海運という会社が、コソコソと営業して消費物資・日用雑貨の輸出で成果を上げています。衛生用品や子供服などの日用品、島根県の瓦、牡丹の球根、岐阜県関市の刃物などの輸出をコンテナ単位で始めて、だんだんと軌道に乗ってきているように聞いています。

在日ロシア人のビジネスマンも活躍

京都に住んでいるロシア人女性で、エカテリーナさんという方がいます。彼女はロシア・イルクーツクの Yanta 社製ひまわり油、大豆油、マヨネーズなどの輸入販売をしています。品質の良いひまわり油で、スーパーに卸したり、阪急百貨店でも売っており、素晴らしい業績をあげている。私は、昔は「ロシアのものは何を持って来ても日本では売れない」「品質が悪くてダメだ」と思っていたのですが、最近は違うのですね。探せばロシアにもいいものがある。

日本に住んでいるロシア人が会社を設立して頑張っているケースはほかにも多数あります。

ロシア人女性で大阪在住のリリアさんという方は服飾デザイナーです。ドレスをデザインして制作・販売していて、相当高価なドレスですが、北新地の店で飛ぶように売れているそうです。

神戸にはバラノフという男性がいて、元町でチョコレート屋さんを開いています。この人の先祖は帝政ロシア時代に「バラノフ」というブランドのチョコレート屋さんだったのですが、ロシア革命で工場を全部没収されてバラノフ・ブランドが無くなった。彼はウラジオストク出身で、日本語もよくできる人ですが、先祖の名前をもう一度復活させたいと、神戸で非常に美味しいチョコレートを作っています。

このように、日本からロシアに行きビジネスをやっている方もいるし、逆にロシアから日本に来て頑張っている方もいる。現在約 1 万人のロシア人が日本に住んでいます。その中からも新しいビジネスマンが生まれてきています。

ロシアと出会ってよかった！

私は、文章を書くのが好きなもので、先ほど紹介した私の体験談をまとめて、「落第社長のロシア貿易奮戦記」という本を出版しました。また、関西日露交流史研究センターという団体を立ち上げて、日ロ交流情報をインターネットで配信しています。これ

からは日本に住んでいるロシアのビジネスマンや芸術家、多彩な活動をしている方々をインタビューして、そのルポルタージュをまた本にして出版したいと考えています。

何しろ 19 歳で初めてロシアと出会いまして、ロシア語を勉強して、ロシア相手の貿易をやってきました。倒産もし、全財産を失って路頭に迷ったり、いろんなことがありましたが、やっぱり私はロシアと出会ってよかったなとは思っています。人生あと何年残っているかわかりませんが、充実した人生だったなと思います。お金をいっぱい稼いでも、病気になったり早く死んだりしたら意味がありません。私はロシアの人たちと心と心がつながって、自分の人生も少しは意義があったと最近思うようになりました。

これまで 40 年以上ロシアとつき合ってきて、これからますます日本とロシアが友好交流を深めて、お互いの国が発展するように願っております。

(2017 年 11 月 28 日大阪、ロ東貿セミナーでの報告)

「落第社長のロシア貿易奮戦記」

岩佐毅著／展望社／定価 1900 円＋税

岩佐さんの 40 年間におよぶロシアビジネス経験。「七転び八起き」の言葉がそのまま当てはまる半生の記録。ソ連時代のビジネス慣行や当時の世相も映して興味深い。

日本におけるロシア年 **特別協賛企画**

加藤登紀子

百万本のバラ ディナーライブ

日時: 5 月 18 日 (金) 18:00 開場/18:30 開始

会場: 名古屋国際ホテル「国際ホール」

会費: A 席 20000 円 / B 席 18000 円

(全席指定・フルコースディナー・飲物付)

主催: 一般社団法人 日ロ友好愛知の会

TEL/FAX: 052-485-6853

後援: 在大阪ロシア連邦総領事館

日ロ友好愛知の会が「日本におけるロシア年」特別協賛企画として、加藤登紀子さんのディナーライブを開催します。

曲目は、百万本のバラ、遠い祖国、悲しき天使、花はどこへ行った、リリー・マルレーン、愛の賛歌など、心に残る歌ばかり。シベリアの東・ハルビンで生まれた加藤登紀子さんは東大在学中にシャンソン歌手としてデビューして半世紀。それぞれの時代の世界の愛の歌を歌い続けてきました。2018 年の日本年・ロシア年ではサハリンでの公演も予定されています。皆様のご参加をお待ちしています。

2017 モスクワ戦車バイアスロン 観戦記

ロシア国防省の主催で 2013 年から毎年行われている「戦車バイアスロン」。ロシアをはじめカザフスタン、ベラルーシ、アルメニア、中国など十数カ国の軍団が射撃や障害物、走行技術、速さなどを競います。

2017 年は 7 月 29 日から 8 月 12 日までモスクワ郊外のアラビノ射撃場で予選・本戦が行われましたが、それを観戦した東京都在住の軍事マニアで、ペンネーム「ねこくま」さんにそのレポートを書いていただきました。(編集部)



砂塵を巻き上げて壕を越える T72 主力戦車

砂塵を巻いて駆け抜ける戦車群

ねこくま (東京都在住)

8 月 10 日 戦車バイアスロン プレ・ファイナル

50 トン近い巨大な戦車が、実戦さながらに全力で疾走し、発砲する。これが戦車バイアスロンの魅力である。富士実弾射撃演習や陸上自衛隊観閲式で、日本でも射撃や戦車走行の様子は見ることができる。しかしモスクワ戦車バイアスロンはアクセル全開でアラビノ射撃場を爆走する実戦モードである。実戦さながらに手荒く扱われるロシア戦車の射撃走行は富士山麓では決して見られない。

競技の周回路間近に大屋根のある快適な観覧席が用意してある。座席の周りには大型三脚やカメラバックを置く余裕もあって落ち着いて撮影できる。



バイアスロン会場に設けられた観覧席

目の前を 50 トン近い現用の T72 戦車や T90 戦車が轟音とともに爆走する。戦車が通り過ぎた後には猛烈な砂塵が巻き上がる。人もカメラバックも砂まみれである。散水車が頻繁に水をまくが、強烈な砂埃には何か対策を考えた方が良くかもしれない。ただ観客席と走行路の間には直径 1 m 近いコンクリート管が植えてあっていかな戦車としても観客席に飛び込んでくる心配はなさそう。けれども砂塵は防げない。少なくともしっかりカバーの閉まるカメラバックは必需品だ。

戦闘用車両だから当然と言えば当然だがこんなに手荒に扱って大丈夫かとこちらが心配になるほど全速力で路面を走る。

油断していれば砲弾が飛んでくるのだから当たり前だが、多少の障害物には遠慮無く突っ込んで乗り越える。カタピラへの負担は大変なものだろう。



砲塔上を飛行するドローンを見つけられるだろうか？戦車バイアスロンの参加戦車の直上にはドローンが張り付いて競技の様子を実況中継している。40~50 キロくらいは出ていそう。一体何キロで走行しているだろう。戦車は思ったより速い。観客席から遠いところで発砲しているのは音と閃光で分かる。しかしさすがに遠い。戦車砲の発砲に限って言えば富士の方が撮影しやすい。

8 月 11 日 クビンカ戦車博物館

クビンカ戦車博物館は、第二次世界大戦期のドイツ製タイガー戦車を所蔵することで日本でも知られている。しかしこの博物館には、旧ソ連製戦車はもちろん西側の米軍からイギリス軍、旧日本軍など多種多様な旧型、現用の戦車や装甲車両が展示されている。私がクビンカに到着したとき、丁度イスラエルのマガフ戦車がエンジンを始動し、トラクター代わりに西ドイツ製マルダー歩兵戦闘車の入れ替え作業を行っていた。おかげでコンチネンタル製ディーゼルエンジンの音を堪能することができた。

もちろんクビンカにはソ連製 T34 型戦車の各型とともに、

評判通り旧ドイツ製の 4 号戦車や 5 号戦車、200 トン近い巨大な Maus 戦車やカール自走臼砲などが展示され、ドイツ戦車の存在感を示している。クビンカのバックヤードには工場と言って良いほどの本格的な作業場が併設されて、戦車や装甲車両のレストアを行っている。所蔵車両は頻繁に入れ替えられているようで、今回はタイガー戦車が見られなかったのが残念だ。



写真はイスラエルのマガフ戦車。取って付けたような爆発反応装甲の装備状態がよく分かる。米国製 M60 戦車をディーゼル・エンジンに換装し、105mm 戦車砲に換装するなどイスラエル独自の改造を加えたもの。どうしてロシアが持っている？車両の保存状態は非常に良く、クビンカではトラクター代わりに他の展示車両を移動させるために使っていた。



旧ドイツ、超重量級 Maus 戦車。重すぎてクビンカから移動できないそうだ。後ろに見えるのはカール自走臼砲。



クビンカにはスウェーデンの S 戦車など西側の現代装甲車両も展示しており多彩な所蔵車両に驚く。無砲塔の車体に着き出した戦車砲、何度見ても不思議な戦車である。

パトリオット・パーク

充実著しいパトリオット・パークは、これからのロシア兵器輸出のためのショールーム的役割を担うようだ。残念ながら併設の売店はまだ開いていなかったが、軍服からマグカップまで多彩な商品を扱っているようだ。本格的な展示館で、屋外に常設される航空機やミサイル、装甲車両などの展示も充実している。これらを見て歩くだけでも一日かかりそうだ。戦車バイアスロン会場のアラビノ射撃場や、クビンカ戦車博物館も近く、兵器輸出の商談にも便利そうだ。この日は翌日から開催される兵器見本市の準備中で、新型歩兵戦闘車やアルマータなど主力戦車がトレーラーで運び込まれている最中で、正直なところ日程を延長して展示会にも参加したいところだった。



ナポレオン戦争時代の騎馬戦闘の模擬戦



アラビノ射撃場の鉄路を走る装甲列車？武装列車？

まだ整備が終わっていない不整地だらけのパトリオット・パークで行われているのが、ナポレオン時代の騎馬模擬戦と装甲列車への航空機による対地攻撃、友軍機による迎撃ショーである。戦車などの運び込みのためだろう、何とアラビノには機関車が走行できる本格的な鉄路がひかれているのである。ドイツ地上攻撃機っぽい単発機をシュトルモビクが蹴散らしたあとに主役の登場である。

100 機を超えるロシア空軍機フライパスによる航空パレードが始まった。航空パレードについては、ツアー出発前には情報がまるで無かったので驚かされたが、戦略爆撃機 Tu95 ベア、Tu22 バックファイア、Tu160 バックファイアや、巨大なレドームを装備した A50 メインテイ早期警戒管制機と

いった大型機が編隊を組んでアラビノ上空を飛行する。Su35 の編隊やエンテ翼付きの新型スホーイに乗り換えたロシアン・ナイトの曲技飛行とともに、大型戦略爆撃機の編隊飛行が続く。これだけの規模の飛行展示は実に珍しく、ソ連時代の革命記念日の赤の広場上空のパレードに迫る規模だと思われる。



スホーイ 35 の編隊、逆光なのはちょっと残念



Tu95 ベア戦略爆撃機

Tu95 ベア戦略爆撃機は、ターボプロップ 4 発に二重反転プロペラを装備する長距離重爆撃だ。内翼のエプロンに巡航ミサイルや長距離対艦ミサイルを装備して、ミサイル母機として使用される。飛行中の姿はスクランブルの F15 との編隊写真が防衛白書で見られるくらいである。



A50 メインバイン早期警戒管制機

高空からレーダー侵入する敵機を捜索、味方機を最適な迎撃コースに誘導する。現代航空戦では鍵的役割を担う機種である。

これらの戦略爆撃機は MAKS (モスクワ航空ショー) で地

上展示されることはあったが、戦略爆撃機が編隊でフライパスする様子を撮影できる機会は大変貴重で、私にとっては初めての経験であった。ニコンの D4S と 200-400 ズームで追いかけたが、途中から腕が上がらなくなるくらいフライパスは長時間に及んだ。

8 月 12 日 戦車バイアスロン 決勝観戦



戦車バイアスロン本戦には 13 カ国のチームが参加。10km のコースを周回しながら各国の参加車両が射撃や弾薬補給、走行技術などを競う。結果は、ロシアチームが 1 時間 30 分 43 秒で優勝。2 位カザフスタン、3 位ベラルーシとなった。驚いたのは観客の熱狂である。立ち上がる、自国チームの活躍に叫ぶ、踊りだすので、撮影には最悪の条件。目についたのは中国チーム応援団の行儀の良さ。ロシアなどの兵士達は感情を素直に表に出していた。・・・戦車撮影には落ち着いた雰囲気の前選が向いている。とくに動画撮影したい人は、観客の反応も含めて記録したいのでなければ本戦は避け前選に賭けるべきだ。

出場戦車の走路には必ずドローンが平行して飛行し、走行や射撃の様子を背後の大型スクリーンに上映する。見ていだけならロシア語が分からずとも競技の様子は手に取るように分かる。



中国チームの 99 式戦車

ガードレール代わりの頑丈な対戦車障害物が戦車の破壊力を物語る。写真では見たことがあるが、実車それも機動中の 99 式戦車を見るのは初めてだ。

8 月 13 日 モスクワ中央軍事博物館

最終日に訪れた中央軍事博物館の展示室には搭載ミサイルの自爆事故で沈没した原潜クルスクの遺品が展示してあった。100 人を越える乗員全員が船とともにバレンツ海に沈み死亡した。この悲劇を伝えるためにクルスクの窓枠や乗組員の遺品の時計などが展示されており胸が痛む。

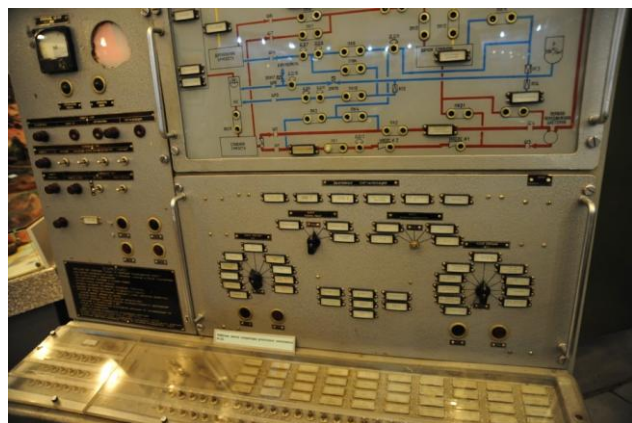
また冷戦期の遺物である戦略ミサイルの発射管制コンソールが展示されている。おそらく発射要員が核戦争の恐怖に耐えながら任務に就いていた装置がそのまま置いてあるのだろう。東側の発射管制システムは映画やテレビでしか見たことが無い。当時地下サイロに収納されて、ボタン一つでアメリカの戦略目標を核攻撃するために 24 時間体制で待機していたミサイル・サイロの模型も置かれ、クルスクとは別な意味で体が竦む。これらのミサイルは今も最新型に置き換えられて米国をはじめ世界各国を狙っている。ロシアはやはり核保有国なのである。

館内には当時の米ソ関係をぶちこわした 1960 年 U2 撃墜事件の主役・米国製 U2 戦略偵察機の残骸が、これを撃墜した SA2 ガイドライン・ミサイルとともに展示してある。

屋外には SA2 ガイドライン地対空ミサイルや最大級の移動式 ICBM トーポリ M などのミサイル群が、航空機や戦車とともに展示されている。残念ながら野ざらしで、展示品の保存状態は悪い。



撃墜された米国製 U2 戦略偵察機の残骸



戦略核ミサイルの発射コンソール 24 時間体制で核戦争の恐怖に耐えて配置にっていた兵士を想像すると思わず鳥肌が立つ。



ガイドライン対空ミサイルの後ろにはミル・ヘリコプターやミグ戦闘機など旧ソ連製兵器の数々が見られる。



大型トレーラーに積載されたトーポリ M 大陸間弾道弾

* * *

こうして怒濤の 5 日間が終わった。今年は MAKS (モスクワ航空ショー) には参加できなかったが、今まで見たことのない大型機の編隊飛行を撮影し、初めての戦車バイアスロンで疾走するロシア戦車を参観、さらにパトリオット・パークやクビンカ戦車博物館で多数の現役戦車とともに第二次世界大戦期のパンサーや T34 にも会えた。今回の旅行は MAKS 不参加を十分に補える盛り沢山の旅だった。しかも帰国すれば富士火力演習が待っている。機動し射撃する陸自とロシア現役戦車を比較して見る事が出来る。

旅を終えての感想はロシアでは戦車に限らず多くの兵器が日本より身近にあること。どこの国でもそうだが子供達は力強い戦車が大好きだ。願わくば戦車好きの子供達が人生のおわりまで無邪気に戦車好きでいてくれることを祈ってバイアスロン観戦記を終える。



日本ドストエフスキー協会

入会のご案内

本会は、ロシアの作家フョードル・ドストエフスキーの文学とその世界観に関する研究とその普及を目的とし、広くロシア文学・文化を愛する人々の輪を作ることをめざしています。

会長: 亀山 郁夫(名古屋外国語大学学長)

副会長: 望月哲男(国際ドストエフスキー協会副会長)

URL: <http://www.dsjin.jp/index.html>

申込みはメールで(会費は無料)⇒ dsjin_gg@nufs.ac.jp

キルギスから日本語教師の受入条件で、追加の情報が届きました。昨年 10 月から赴任した三田さんが教師として奮闘してくださった結果だと思いますが、もう少し給料を増やして、居住がアパート希望の場合は補助を出すという方向で条件の改善が準備されています。

日本語教師募集!

キルギスの11年生学校「ピリムカナ・カント校」

キルギスで日本語教師をやってみませんか。
ビシケク郊外にある 11 年制学校で、日本語教師を募集しています。やる気のある人であれば、年齢、性別、学歴を問いません。給料は少なく、往復旅費も自己負担と、ほぼボランティアの条件ですが、教師経験を積み、ロシア語もしくはキルギス語を学習するよい機会になります。

<条件>

受入校: ピリムカナ・カント校(私立の 11 年制学校)

所在地: ビシケク郊外(バスで約 30 分)のカント市

授業数: 1 授業 40 分×1 日 5 授業×週 5 日

給料: 月額 150 ドル~200 ドル

宿 舎: ホームステイ 2 食付、または学校の寮(1 人部屋/朝夕食は無料提供)

* アパートの場合は月 100 ドルの家賃補助。

特 典: 希望によりロシア語またはキルギス語の授業が無料で提供されます(40 分授業×週 3~4 回)。

募集人数: 1~2 名

期 間: 18 年 9 月~19 年 6 月

* 期間は希望により延長・短縮可。1 年より短い期間(例えば 4~5 か月)の赴任も可能です。

必要書類: 履歴書、卒業証明書、日本語教師資格または教師経験のある方はその資料

問合せ先: JIC 東京事務所 TEL: 03-3355-7294

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

JICのロシア語留学・研修

29 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 29 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,300 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学9月生・募集中



3月募集開始!
早めにお申込みを!

期間: 2018年9月1日より10ヶ月

締切: 2018年6月15日(金)

モスクワ国立大学 827,000 円(授業料 10 ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 820,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 326,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

※極東連邦大学は、10 月 1 日から 10 カ月になります。

◆JIC ロシア留学デスク◆

ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。

お気軽にお越しください。

東京事務所 平日 9:30-18:00 03-3355-7294

大阪デスク 平日 9:30-16:00 06-6944-2341

※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

◆◆編集後記◆◆

▼今号は、掲載すべき記事がたまったため臨時号として発行しました。▼ロシア革命 100 周年にちなんで藤本和貴夫先生の講演録は、20 世紀最大の社会実験と言われたソ連社会主義がどのような経過をたどって誕生したかが分かりやすく解説されています。▼ロシアビジネス 40 年の岩佐毅さんの体験談、モスクワ戦車パイアスロン観戦記もそれぞれロシアの今を知る興味深い読み物となっています。気になる記事から読んでみてください。

▼次号(4 月 10 日号)は昨年 11 月の JIC セミナーでの亀山郁夫先生の講演録「ロシア革命の文学的・思想的背景」を中心に編集する予定です。(F)